

◇ 11月の天文暦 ◇

日	時	記	事
2	11	月	最近
3	6	望	
8	11	立	冬 (太陽黄経 225°)
10	6	下	弦
14	24	月	最遠
18	11	朔	
23	8	小	雪 (太陽黄経 240°)
24	3	水	星 東方最大離角
26	2	上	弦
	8	土	星 衝
30	20	月	最近

ガボシュキン夫妻



(撮影 成相恭二)

夫婦で天文学者というのは、日本にはほとんどないが、欧米にはかなり多い。現在そのピカいちは7月号に登場したパービッジ夫妻であろう。ガボシュキン夫妻はすでに盛りを過ぎた感はあるが、一昔前まではパービッジ夫妻と同じような有名な存在であった。この両夫妻に共通したことは旦那様より奥様の方が学者として少しうわ手であること、旦那様が多少変り者であることなどである。

ガボシュキン夫妻のことは、実は本誌52巻10号にかなり詳しく書いた。そのころは戦後久しく会っていなかったが、その後IAU総会などで二十数年ぶりで会ったが、さすがに年をとったという感じがした。二人とももう70才前後となったので無理もないが、それでも往年の意気は感じられた。

セルゲイはロシア生れ、ドイツで大学を了え、学位をとってからアメリカに行ったのが1933年、35才のときである。そこでセシリア・ペイン女史と会い翌年に結婚している。二人ともかなりの晩年結婚である。ペイン女史は英国生れ、ケンブリッジ大学を了え、アメリカへ渡っ

てハーバードとの兄妹校ラドクリフで学位をとった。二人ともハーバード天文台で主として変光星の仕事と続け、多くの著書や論文を出しているの、詳しい紹介をする必要もないであろう。共著 Variable Starsはその労作である。ペインの方はその後、Stars in the Making, Galactic Novae などの名著も出している。

このように、偉丈婦とも言えるセシリアの方が光っている。体もセシリアの方が大きく、旦那様の方がおさえられていると思うが、私のみたところではさに非ず、セルゲイもロシア人特有の強さがある、なかなか負けていない。不思議な引力で結ばれて保たれてきた特異連星という感じがする。日本の社会ではこうした連星は存在し得ないような気がする。

私が初めて会ったときは、すでに長男のエドワードが三つくらいになっていた。その彼が今春水沢の国際会議に来て会ったが、すでに中年の天文学者になって、専門は違わが親のあとをついでいる。私にとっては思い出の多い一家である。

(古畑正秋)

